

英文雑誌 “MINI WORLD” を使った多読指導の試み

堀 登代彦*・松 田 奏 保**

An Attempt to Use an English Magazine “MINI WORLD” for the Extensive Reading

Toyohiko HORI, Kanaho MATSUDA

Abstract

The purpose of this attempt is to give the students opportunities to read a lot of English texts and have them get used to it. “MINI WORLD” is the English bimonthly magazine which has various topics and easy level of grammar. The students can choose the articles they are interested in. We used “MINI WORLD” as a good teaching material for extensive reading.

1. はじめに

学校の英語授業のリーディング指導で最もよく行なわれるのは、精読と呼ばれる方法である。精読型の授業では、語彙指導から始まって、文法規則や文構造の指導、読解ストラテジーの指導、また音声的指導やトピックの背景的知識の指導、さらには国際理解の指導に至るまで、実に盛り沢山の多目的指導が行なわれている。

だが、この精読中心の方法では、学生が読む英文の絶対量があまりにも少ない。英語を「習う」ことに終始してしまい、英語に「慣れる」機会が乏しい。新しく習った知識は繰り返し使って慣らさなければ、自分のものとして定着しない。

例えば学生に、いきなり1～2ページ程度のさほど難しくない英文テキストを与えてその内容を尋ねてみたとする。多くの学生は、まず読むスピードが決定的に遅い。内容理解度も決して高いとは言えない。語彙不足や背景的知識の不足もあるが、ある程度の量とまとまった内容を持つ英文を読み通すことに慣れていないという印象が強い。

これは精読に片寄り過ぎたアンバランスな読解指導、あるいは多読は精読がひと通り終わってからでよいという考え方に大きな原因があるのではないか。精読と多読とのバランスのとれたリーディング指導が、もっと早い段階から求められるのではないだろうか。

2. 多読指導の理論

多くの英文を読むことで英語力を高めることができると主張したのは、1980年代から90年代の英語教育理論に大きな影響を与えた S. D. Krashen である。

彼は、T. D. Terrel が実践研究から編み出した The Natural Approach（言語を自然に習得させることを目指した英語教育法）に、第二言語習得に関する5つの仮説を打ち立てて、その理論的な裏付けを行なった。理解できるインプットを大量に与えることを特に重視し、話すことの指導よりも理解することの指導を優先すべきだと考えた。

彼のインプット仮説は、言語習得のメカニズムを説いている。それによると、メッセージの意味が理解された時に習得が起き、学習者の発達途中の中間言語の現段階より少しだけ越えた文法構造（ $i + 1$ ）が含まれたメッセージの意味が、その場の状況の助けを借りて理解されると、習得がすすむ。例えば教師が学習者に意味のわかるような話し方をすると、自動的に $i + 1$ レベルの文法構造を含んだインプットになるし、学習者に現段階の語学力を少し越えたレベルの（未習得の言語構造や語彙を含む）英文テキストを読ませれば、これも $i + 1$ のインプットになる。文字によるインプットは、音声によるインプットと同じくらい重要な役割を果たすとみなされる。意味の理解に焦点を当てた聴解力指導と読解力指導のどちらも大切である。

また Krashen は、文法学習の必要性も説いて

* 講 師 一般教科

** 講 師 一般教科

いる。文法知識は聴解学習と読解学習のいずれの場合においても、モニターの役割を果たして学習者の活動をサポートするのだ。

さらに The Natural Approach では、学習者が興味を持っている題材のテキストを読んで理解した時、より効果的な習得が起きると考えている。学習者が子供の場合は絵本や物語の読み聞かせが、青少年や大人には楽しみのための読書 (pleasure reading) や自由に自発的に読むこと (free voluntary reading) が、教室外の活動としても勧められている。あくまでも自分が読みたいと思ったものを楽しんで読むことが大切なのである。

従って、この The Natural Approach の教材は、学習者が興味を持っているか必要としている内容のものとなる。このため教材は実に多様性を持つことになる。Krashen は言語習得のための最適な教材として、次のような条件のものをあげている。(1)理解できるもの、(2)学習者にとって興味深いか、関わりのあるもの、(3)文法の複雑さの順に並んでいないもの、(4)十分な量があること。

3. 英文雑誌 MINI WORLD

今回の多読指導で利用したのが、ミニワールド (MINI WORLD) という英文雑誌である。Krashen が言語習得のための最適な教材の条件としてあげた(1)~(4)にも、かなり合致しているということで、この雑誌を選んだ。

この雑誌の大きな特徴は、使用語彙が基本2000語レベルに押さえられていることだ。完全にオーセンティックな教材を使うと、未知語が多過ぎて文脈からの内容の判断は困難であるし、辞書を使ったとしても辞書引きだけで疲労困憊するであろう。またほとんどの記事が1~2ページで完結しており、分量的にも適切である。文構造の難易度も含めて判断すると、英検で言えば準2級レベル、従って高校2年生程度の英語力があれば、さほど辞書を引かなくても比較的楽に読めそうな英文テキストである。

文体的にも、平易ではあるがネイティブ・スピーカーが日常使うナチュラルで適正な表現が使われている。日本の英語教科書にありがちな、英語学習用に、習得すべき語彙・イディオム・文法や構文などを無理やり詰め込んだ不自然なスタイルの文章ではない。

記事の内容的な特徴としては、世界各国の政治

経済社会情勢から、科学技術や環境問題、世界各地で国際的に活躍する人々の紹介や各地の様々なトピック、そして映画・音楽・スポーツなどの娯楽や文化に至るまで、非常に幅広い領域に渡っている。これら最新の話題が、世界各国の現地ライターや編集部が取材したオリジナルの記事として掲載されている。また東京にあるミニワールド社が発行しているため、特に日本人読者の興味関心を引きそうなものが選ばれている。

さらに、約7割の記事はカセットテープに録音されており (その内のいくつかには、内容理解を確認するためのQ & Aまで吹き込まれている)、リスニング練習や音読練習などの音声を用いた学習を行なうこともできる。

4. 今回の多読指導の狙い

平成11年度第2学年全5クラスの英語A (2単位) の授業において、2名の教官により実施された。本校の英語Aの授業は、総合的な英語学習を目指す文部省検定教科書の英語I・IIの使用を中心に行なわれている (実際には「読む」ことに高いウェイトが置かれる場合が多い)。

私たちが今回の試みを実践するに至った大きな理由のひとつは、第2学年の英語Aの授業が週2時間しかないことだ。1.で述べたように、それであっても精読に傾きがちで、インプットされる英文量が少ない。従来通りの指導方法に対して、少し大げさに言えば危機感すら持っていた。

もうひとつのポイントは、英語学習へのモチベーションをいかに高めるかである。試験や就職のためなどという外在的理由ではなく、英語 (学習) 自体が楽しいし興味が持てるという状態に学生を導ければベストだ。多読指導に関して言えば、学生が自らすすんで読みたくなる内容の英文テキストを使うことが肝心であろう。

だが人の好みは千差万別なので、全員が同じテキストを使う全体学習には限界がある。そこで、各自が興味のある分野のテキストを選択的に読むという個別学習の形態が必要になる。一斉授業での精読用の教科書と個別学習での多読用の教材の2本立ての体勢が望まれる。

このような方針から、年度当初に副教材として英文雑誌ミニワールドを2年生全員に購入させ、各自の興味ある好きな記事を選択的に読ませることにした。

5. 授業の方法

今回の雑誌ミニ・ワールドを用いたリーディング指導は5月末から開始し、6月初めまでに1記事、6月中旬～7月中旬に3記事、夏休みに1記事を読み、そして9月末の前期期末試験において初見の英文を出題し、実践的なリーディングテストを行うことで終了した。

以下、この4つの単元をどのような流れでどのようにして行ったのかを簡単に示し、その後詳しく説明と分析を加えることにする。

A. リーディング・テスト（5月末～6月初）

- ① 記事名：“Q & A on English Education”
記事を読み、その内容に対する質問に日本語で答えるテスト方式で提出させ、採点する。
さらに前期中間試験の出題範囲(20点配点)とする。

B. リーディング・レポート(6月中旬～7月中旬)

- 以下の②～④の「レポート」は、
- 1) 中見出しの日本語訳
 - 2) 各パラグラフの要約（1～2行程度）
 - 3) 未知の単語・熟語とその意味

- 4) 本文で理解できなかった箇所を2つあげる
という4つのパートを完成させて提出させる。

- ② 練習レポート：1～3時間目+家庭学習
記事名：“Success across Borders”
初めに「英文リーディングのコツ」の説明をし、読み方・要約の仕方を練習してから各自でレポートに取り組んでいく。ここでは上記の4)ではなく、代わりに「全体の要約」を書かせる。

- ③ No.1レポート：4時間目+家庭学習
「1ページ記事」【図1】
8つの記事の中から好きなものを1つ選択し、授業および家庭学習でレポートを完成させ提出してもらう。理解度確認のため、内容についての個別面接も行う。

- ④ No.2レポート：5，6時間目+家庭学習
「2ページ記事」【図1】【図2】
8つの記事の中から好きなものを1つ選択し、授業および家庭学習でレポートを完成さ

【図1】 ミニワールド・リーディングレポート NO.1& NO.2 記事タイトルと選択者数一覧

	記 事 タ イ ト ル	M 科 斗	E 科 斗	J 科 斗	S 科 斗	K 科 斗	合 計
No. 1 レ ポ ー ト	1. 子供の英語教育、早期スタートは必要か？	2	6	7	1	4	20
	2. 英文スポーツ雑誌「スポーツワールド・ジャパン」	3	1	0	1	1	6
	3. 前園真聖、新天地ブラジルでのサッカーと生活	3	7	4	7	14	35
	4. 女子テニス界の新星、アンナ・クルニコワ	5	1	3	8	0	17
	5. 路面電車でアムステルダムを散策	5	7	2	7	3	24
	6. 英国の歴史が凝縮された街、ダーラム	8	3	3	4	3	21
	7. 1950年代ジャズの巨人、チェット・ベーカー	2	2	3	2	3	12
	8. 新着映画紹介「バグズ・ライフ」	13	13	15	11	13	65
No. 2 レ ポ ー ト	9. 変わりつつある日本の英語教育	3	4	3	0	2	12
	10. ジャッキー・チェンが新作でハリウッドへ進出	11	10	11	10	22	64
	11. カナダのイヌイットの新しい未来	1	1	0	1	2	5
	12. ソ連崩壊後の激動する中央アジア	6	2	2	3	1	14
	13. CGを駆使して大ヒットするカナダのTVアニメ番組	3	5	1	2	1	12
	14. デリシャスなお弁当についた高い代償	2	5	4	5	2	18
	15. 街中チョコレートだらけのアメリカの都市ハーシェイ	1	3	3	11	1	19
	16. 空気も異なる聖なる地、チベットのヒマラヤ山系	14	10	13	9	10	56

【図2】

FUTURE

“HOLLYWOOD NORTH” LEADS THE WAY

by Stephen Quinn
(in Vancouver)

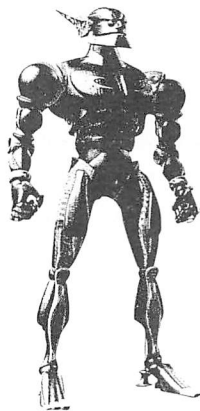
When one thinks of new technology and successful television programs, Vancouver is usually not the place one thinks of. This city, known as “Hollywood North,” has been and is home to such hit TV shows as “The X-Files,” “The Crow,” “The Outer Limits,” and “Stargate SG-1.” It is also home to the first completely computer-made animation show, “ReBoot.”



The animating team at Mainframe

“ReBoot” (first broadcast in 1994) was an idea started in the 1980s when Gavin Blair and Ian Pearson did the computer graphics (CGI) for the Dire Straits’ video “Money for Nothing.” The graphics, while new and exciting, were not perfect, but they were the starting point for Mainframe, the company that produces “ReBoot.” Blair and Pearson figured they could do a TV show using the same CGI technique. They decided to set the show’s stories inside a computer.

In the past, animation was hand-drawn and flat, creating two-dimensional scenes. “ReBoot” is three-dimensional (3-D) and built on a mathematic model that is loaded into a computer to be viewed from any angle. An animator will draw a character in a scene, then draw the character is to move. Using



Microsoft Softimage, this information is put into a computer and the software then creates movement. This innovation was honored by the Smithsonian Institution in 1998. Phil Mitchell, a co-creator of “ReBoot,” said at the ceremony: “It’s quite an experience to receive a medal in the company of inductees (those honored) such as the United Nations and NASA.”

Other shows, films, video games, etc., use actors or puppets with sensors attached to record movements that are then captured on computer. Donkey Kong Country and Terminator 2 are examples of this technique. The bad point is that once the action is recorded, you cannot reshoot any scenes without redoing the entire process.

Besides “ReBoot” and another show, “Beast Wars,” Mainframe will

soon have two more shows out. One is called “War Planets,” (its other title is “Shadowriders”) and the other is “Weird-Ohs,” based on racing cars from the ‘60s.

are circulating (moving around) and changing jobs.”

The U.S. seems to be a better place to set up a business because of lower taxes, so one might think that

A Different Level

According to Mainframe’s director of communications, Main Welman, “Weird-Ohs” will take computer animation to the next level, with a different feel from “ReBoot.” “The look is entirely different. ‘ReBoot’ is kind of techno-looking, so it has a lot of shiny surfaces and has a sort of cold look to it. ‘Weird-Ohs’ is very organic (natural-looking).”

Now that Mainframe has done IMAX theater films, video games, and four TV series, does Vancouver have enough qualified people to keep up with the amount of work?

“One in three animators in the world is Canadian, so, we’re not worried. You should see the number of reels ([sample] tapes) that arrive every week, especially from Americans who want to get out of L.A. There have been several [film] studio closures over the last year, so lots of people in the U.S.



Dot Matrix with a couple of binomes

there would be pressure to move Mainframe to the U.S. Welman disagrees with this viewpoint. “No, because one of our BIGGEST draws (best points) is the city of Vancouver and the Canadian social services (i.e.,



FUTURE

health care) system. People understand that quality of life costs something (i.e., people pay higher taxes in Canada for cheaper health care).”

Although rumors of a “ReBoot” movie have been heard for a while, Welman says right now the future of “ReBoot” is unknown. It was broadcast in the U.S. for two seasons, but the third season was only broadcast in Canada.

As for Mainframe in the next five years, despite all the projects underway Welman comments, “Television will always be our bread and butter (main business). But film work is where we’re headed in terms of new directions. Five years isn’t all that long in the movie biz (business). It takes at least two years to make a film. So in five years maybe we’ll have two CGI films under our belts (finished)!” Currently they are developing a film based on a children’s book, *The Sign of the Seahorse* by Australian author Graeme Base. □

April-May 1999 MINI WORLD 25

【図3】

2年英語A 夏休み課題 記事タイトル一覧表 (MINI WORLD NO. 45~58)

《A》映画・音楽・スポーツ

1. モデルから女優へ転身、キャメロン・ディアス
2. フランスW杯サッカーの展望とフリーガンの脅威
3. スペインとオーストラリアのウィンドサーフィン
4. ディカプリオ来日会見「タイタニック」を語る
5. サンドラ・ブロック「スピード2」裏話、恋と将来
6. 「ビバリーヒルズ青春白書」番組裏話と俳優の横顔
7. 「ロミオとジュリエット」ディカプリオとその素顔
8. リブ・タイラーとロックンロール
9. ケビン・コスナー、アメリカンヒーローの実像
10. 「X-ファイル」主演2人にインタビュー
11. 元祖スーパーモデル、シンディー・クロフォード
12. SF X・CG映画の魅力「トイ・ストーリー」
13. マライア・キャリー、1996年来日記念インタビュー
14. イーグルス来日、アメリカン・ロック最後の伝説
15. スノーボード1996年最新情報

《B》科学技術・環境問題

16. DNA鑑定、犯罪科学捜査の最前線
17. 建物が頭脳を持った！「インテリジェント・ビル」の将来
18. 火星に知的生命体は存在するか？
19. 家庭のテレビで気軽にインターネットを楽しもう
20. サイボーグ誕生の可能性は？
21. 太極拳、針、漢方薬…今また注目される中国医療
22. 飢餓撲滅に効果的な対策はあるのか？
23. 共同開発に取り組む日米の自動車メーカー
24. 熱帯雨林は将来の良薬の宝庫
25. 遺伝子操作で野菜はもっとおいしくなる？
26. マレーシア、エコロジー・ツアーと原住民
27. 海外からリポート、インターネットはここがすごい
28. マルチメディアで私達の生活は本当に変わるのか？
29. エイズ撲滅へ、完全治癒が期待される二つの方法
30. インターネットが気軽に楽しめるサイバー・コヒーショブ

《C》世界各国の最新の話題

31. 世界中に広がるロシア人マフィア
32. アメリカで犯罪から身を守る方法
33. 障害者の暮らしやすい街、アメリカのパークレー市
34. 最新ポップカルチャーの発信地はワシントン北部の都市
35. 神秘的な美しさに満ちたアイルランドの島々
36. 海外とのベンチャー・ビジネスの将来性
37. 有害番組を家庭で規制できる新兵器アメリカで登場
38. 日系ブラジル人たちの今
39. アフリカの島国マダガスカル、独特の文化と動物
40. アメリカのレストラン問題に見る禁煙・喫煙の将来
41. アメリカの人気観光地、デス・バレー（死の谷）
42. 韓国全土に広がるデモ・暴動の嵐
43. クレタ島、ギリシャ神話のヒーローをめぐる冒険
44. アメリカで大人気、ジャパニーズ・アニメの秘密
45. ソフトウェア会社設立、成功の秘密
46. 全世界に散らばる地雷、その撤去作業の現状と将来
47. これぞ、中国の広東料理の真髄
48. 沖縄の米軍基地は本当に必要か？
49. アメリカ本土の常夏の地、フロリダ半島の旅
50. 中国へ留学した日本人学生をリポート

せ提出してもらう。

C. 夏休みの課題レポート

⑤ ミニ・ワールド記事の全訳

過去数年間の3部門45記事【図3】から各自1つずつ選択する。その際、全員が異なる記事となるようにする。レポートは、大見出し・中見出し・囲み記事もすべて日本語訳させる。

D. リーディング・テスト（前期期末試験）

初見の英文を2題読ませ、それぞれ内容に関する英語での質問3問に対して日本語で答えさせる。20点配点とする。

6. 授業の詳細と各課題のねらい

A. リーディング・テスト

① “Q & A on English Education”

この記事には、東京の若者に対して行った英語教育に関する街頭インタビューの回答が載せられている。回答者は10代から20代の男女9人で、大学生、アルバイト、貿易会社勤務など、いろいろな職種の若者である。

授業はテスト形式とし、次にあげる4つの質問に対する答えを9人の回答からそれぞれ探し出し、用意した解答用紙に日本語で書き込むよう指示し提出させた。

1. Why do you learn English?
2. How do you learn English?
3. How is your English ability now?
4. How were English classes in your high school days?

回収した解答用紙は採点をして返却し、授業において9人の回答英文に対する語句・文法事項の説明を行い、学生に自分の解答の間違いを訂正させた。

ここでのねらいは、学生の予習を前提に講義形式で進めていく授業から、その場で英文テキストを与えて考えさせる形式の授業への転換である。従来の講義形式のやり方では、学生はどうしても受け身になってしまうが、今回のようにその場で英文テキストを与えられ、各学生が能動的に授業に取り組まざるを得ない。

こうした授業は学生にとって初めての試みであるから、いきなり難しい長文で内容の堅

いものを選んでしまうと、せっかくの興味や意欲をなくすことになるので、平易な英文で学生が関心の持てそうな内容（自分達と近い世代の若者の英語学習に対する考え方）の記事を選んだ。「その場で英文を読み内容を理解できる」という自信を学生に持たせることも、ここでのねらいである。

また、この記事は前期中間試験の試験範囲に入れた。9つの回答をランダムに並べ替え、それぞれについての英語の質問1問（1つだけ2問）に対し日本語で答えさせる形式をとった。質問は授業で扱った上記1.～4.だけではなく、新たに作った質問も取り入れた。配点は1問2点とし、20点配点とした。

B. リーディング・レポート

② 練習レポート

リーディング・レポートで学生に課している重要な取り組みは、段落ごとの「要約」である。この作業は今までの授業では扱っていなかったもので、まず最初に「練習レポート」を行うことにした。

「練習レポート」の題材に選んだのは、“Success across Borders”という記事である。これは、アジア出身の国際的映画スター金城武が、彼のマルチリンガルな才能によってどのように成功したのかを、彼の生い立ちと共に述べているものである。金城は若者に人気のあるスターなので興味を持っている学生もたくさんいるだろうし、英文の量もそれほど多くはない。

学生に配布したワークシートは、

- 1) 中見出しの日本語訳
- 2) 各パラグラフの要約（1～2行程度）
- 3) 全体の要約
- 4) 未知の単語・熟語とその意味

の4つのパートから成っており、4)の記入欄にはあらかじめいくつかの単語・熟語の意味を提示しておいた。これは、「読もう」という意欲のある時点で辞書引きに時間が取られ過ぎないようにとの配慮で与えた最初だけの手助けである。その後学生が自分で単語・熟語を調べていく際には、これを参考例にして記入させた。

また実際に本文を読み始める前に、ワークシートに載せておいた「英文リーディングのコツ」を説明した。その中で、今回のリーディ

ングにおける目的は「内容を正確かつ迅速につかまえる」ことであり、そのためには「英文の流れに沿って、かたまりごと前から後ろへ読み進める」ようにしなければならないということ、つまり意味内容をとらえるのに「きちんとした日本語の訳文」は必要ないということを学生に伝えた。また、わからない単語を1つ1つ辞書で調べるのではなく、「文脈から推測していく」ことも併せて説明した。

授業では、「1～3段落目まで」のように全体をいくつかの区切りながら時間を与えて学生に取り組みせ、学生が作った要約に対して説明を加えながら訂正していく形をとった。要約をしたことのない学生の中には、内容がわかっても要約の仕方に戸惑う学生も多いことから、最初は説明しながら要約例を示し、それを参考にして以降の要約を学生自身が行うようにした。3時間かけて各段落の要約を終え、全体の要約は宿題にしてレポートを完成させ、次の時間の最初に提出させた。

③ No. 1 レポート

- 8つの1ページ記事の中から1つ選択し、
- 1) 中見出しの日本語訳
 - 2) 各パラグラフの要約(1～2行程度)
 - 3) 未知の単語・熟語とその意味
 - 4) 本文で理解できなかった箇所を2つあげる

の4つのパートに沿って各自がレポートを仕上げていく。1時間で終わらなかった学生は家庭学習で完成させるようにし、全員次の時間の最初に提出させた。

さらに、自分でやった記事に対する理解度を調べるための個別面接も行った。全員が「No. 2 レポート」に取りかかっている中を1人ずつ廊下に呼び出し、各記事に対して事前に用意しておいた5～6問の中から2問を質問し答えさせた。便宜上、記事別にまとめて行い1人1分程度とした。

④ No. 2 レポート

8つの2ページ記事から1つ選択し、No. 1 レポートと同様の形式で各自に取り組みさせた。2時間の授業とその間の家庭学習を用いてレポートを完成させ、次の時間の最初に提出させた。

C. 夏休みの課題レポート

⑤ 記事の全訳

過去数年間のミニ・ワールドから集めた3部門45記事の中から、1人1記事の全訳を課題とした。記事の選択は、1から順番に希望を聞いて手を挙げさせ、もし同じ記事に希望者が重なった場合はジャンケンで決めるようにした。このようにテーマを自分で選択すれば課題に取り組む際の意欲も違ってくるだろうし、全員に異なる記事を与えることによって、他学生のレポートを写して提出することも防止できる。これまでの3回のリーディング・レポートを通して、英語の長文を短期間に読み要約する練習をしてきたが、今回は記事の要約ではなく「全訳」にし、長期休暇中に内容・量ともに手応えのある英文にじっくりと取り組ませることにした。

以上、①～⑤の提出されたテスト用紙およびレポートに対する評価方法は次のようにした。

- ① “Q & A on English Education”：提出させるが成績評価には加えない。
- ② 練習レポート：提出させるが、成績評価には加えない。
- ③ No. 1 レポート：個別面接の結果から3段階評価(A:10 B:5 C:0)とし、前期中間試験へ加点する。
- ④ No. 2 レポート：提出されたレポートを3段階評価(A:10 B:5 C:0)し、前期中間試験へ加点する。
- ⑤ 夏休みの課題レポート：4段階評価(A:20 B:15 C:10 D:5)で前期末試験へ加点する。

D. リーディング・テスト

英文をその場で読みその場で理解する力を試すために、前期期末試験において教科書以外に初見の英文2つを出題し、それぞれ英語による3つの質問に対して日本語で答えさせるテストを行った。1つはアメリカ大陸に生息する有袋類動物の特徴が述べられている文章であり、もう1つは占いについての文章で4種類の占いが紹介されている。前者は131語、後者234語と短めの文章であり、量、難易度ともに適当なものとして選んだ。やや難しいと思われる単語には英文の下に注をつけたが、もしそれ以外にわからない単語があったとしても飛ばして読むか推

測するしかない、いわば実践的なリーディングである。100点満点中20点の配点とした。

7. 授業結果とその分析

7. 1 各単元別

A. リーディング・テスト

英文雑誌の記事を読むのは初めてという学生が大半を占める中で選んだ今回の題材は、インタビューに対する回答文が1つにつき4行程度と短く平易な英文で書かれているので、学生にとって取り組みやすかったと思われる。提出してもらったテスト形式の解答用紙を見ても、欄を埋めている学生が多かった。ただ、英文中に解答が書かれている箇所を見つけれられてもそれを正確に読み取っていない場合もあり、その意味で返却後の授業での説明・答えあわせは、学生が自分の単語・熟語力、そして読解力を見直す良い練習の場になっていた。

この記事は前期中間試験の範囲としたが、既に授業で学習済みであったため得点率は良く、結果的に教科書からの問題と同様、既習英文の内容・読解力の確認テストになってしまった感がある。その点では「リーディング・テスト」としての意味は薄かったと言える。

B. リーディング・レポート

多くの学生にとって、これらのレポートを完成させるのに非常に多くの時間を費やしたようだ。リーディング・レポートの目的である「内容を正確かつ迅速につかまえる」ためには、ある程度の語彙力と読解力が必要であるため、まだこれらの力が不足している学生にとってはなかなか「迅速に」とはいかなかったであろう。

その語彙に関する反省点としては、語彙学習の徹底ができなかったことがあげられる。教官からの指示の不徹底もあって、語彙欄の記入が不完全なものもいたし、その記入以外には重要な単語を暗記させる手だてを与えなかったため、学生はただ辞書で調べるだけで終わってしまい、結果として語彙力を高めることにはならなかった。1, 2年生の段階で語彙力をつけるには、このような教科書以外の教材に出てきた語彙もその都度覚えさせていく必要があるのではないだろうか。語彙学

習は今後の大きな課題と言える。

もう1つは要約に関してである。レポートの評価の際にはそれほど厳密に要約レベルを見たわけではないのだが、やはり教官側が求めるレベルに対しての過不足があったことは否めない。段落のほとんどを単に訳していたり、反対に簡潔すぎて言葉が足りなかったりといった要約である。教官は、要約を見て英文を読めているのか、そして内容をとらえているのかを判断することになるのだが、一方では要約が下手な学生がいるということも考慮しなくてはならない。つまり、英文を読む力がありきちんと内容をとらえていると思われる学生も、要約するとなると過不足のあるものになってしまうのである。これは日本語力の問題と言ってもいいことかもしれないが、レポートの評価をつける際に何度か戸惑うことになった。

C. 夏休みの課題レポート

記事を全訳させるという課題は、それまでに行ってきた直訳直解という指導方針と矛盾するのではないかと考えられたが、大きく「リーディング指導」という枠の中では「精読」も必要であり、それを行うのはやはり時間のある夏休みが適切であった。

提出されたレポートは点検・評価をするのであるが、1クラス40人前後で全員異なる記事、そしてそれを複数クラス分みるにはかなりの時間と労力を必要とした。全員が異なる記事なので、他学生のレポートを写すことなく自分の力でやらなくてはならないという点では良かったのであるが、その分教官側に大きな負担がかかることは避けられなかった。しかし学生にとっては自分で記事を選べるという楽しみもあっただろうし、「B. リーディング・レポート」では選択肢が少なく興味ある記事が見つからなかった学生も、今回のように45の選択肢があれば好みの記事が見つかったはずである。もちろん、記事によって文章量や難易度に多少の差があったのは確かであるが、ほとんどの学生が自分で選んだ記事に真剣に取り組んでいた。

その他気付いた点としては、訳文の字の丁寧さ（きれいさ、読み易さ）と訳文の内容の出来不出来はかなり比例しているということ、また、日本語として意味の通じない訳文

を平気で書いてしまう学生が多いことがあげられる。学生が書いた訳文を読んでいくとおかしな文がでてくるので、それを英文と照らし合わせてみると、単語の意味の取り間違いや文の読み解き方の間違いが見えてくる。意味が通じないことから自分の間違いに気づき、そこから意味の通じるものに訂正できる力も読解力を高めるのには必要である。ただし、この「日本語として意味の通じない文」というのは、語彙力・読解力の不足だけではなく翻訳力も関わってくることなので、これは英語学習での翻訳の意義といった、また別課題になるであろう。

D. リーディング・テスト

前期期末試験で行ったこのリーディング・テストは初見の英文によるものであり、学生の持つ実力が試されることになった。単語の意味がわからなかったり、英語の質問に対して的確に答えることができなかったりとまだ力不足な学生もあり、そうした学生のためにも実践的なリーディングの訓練は継続しなければならないだろう。普段の教科書を使った授業では、単語を1つずつ調べ時間をかけて1文1文訳していき、試験はその既習の英文の確認テストであることが多いが、本当の実力は、今回のように短時間にまとまった量の英文を読み理解できる力があるかどうかである。学生からは量が多いとか点数が取れないという声も聞かれ、まだまだこうした実践的リーディングに苦手意識を持っている学生がいることもわかった。それを改善するためには、とにかく英文を読むのに慣れさせることが第一であり、学生には日頃からその場で新しい英文を読み理解するという機会を多く持たせる必要性を強く感じた。

7. 2 全体的な反省と今後の課題

授業時間の少なさを補いながら、各自が興味を持つ題材の英文テキストを選択して多読することで、英語を読むことに慣れさせ英文感覚を身につけさせようというのが、今回の私たちの研究授業実践の目的だった。

それまでは、まとまった分量の英文を読む機会といえば、教科書や問題集による英語学習の時ぐらいしかなかった学生も多かったであろう。年度当初の授業時、学生は配布された真新しいミニ

ワールド誌を不思議そうに眺め、手にとってそのページをパラパラとめくり、ある一所の記事や写真にじっと見入っていたりした。

全部で40数ページ、日本語の文字はほとんど見当たらず英語の活字ばかりがぎっしり詰まっている。しかしその一方で、外国の街角や自然の風景の美しい写真、おなじみの映画スターやスポーツ選手のスナップ写真なども満載されているこの雑誌から、学生は勉強臭さをあまり感じなかったのではないかと思う。

Krashen の仮説にも基づき、それぞれの学生が自分が読みたいものを楽しんで読むという個別学習の試みは、スタート時点では結構うまくいくのではと考えていた。そして実際に一連の授業をしてみて、いくつかの成果をあげることもできた。

だが、私たちが最も大きく見誤っていたのは、ミニワールドの記事で使われている語彙や文章構造のレベルが多読用の教材としては、私たちの予想以上に多くの学生にとって難しかったことである。従って3本のリーディング・レポートや夏休みの課題レポートを完成させるのにも、莫大な時間を要した者が少なくなかった。そのような学生にとっては、多読用どころか精読用のテキストとしても、このミニワールドの英文記事は難しかったのだろう。

速読や多読では文中に多少わからない部分があったとしても、文脈から語句の意味や話の流れを推測していけば良い。だが、語彙力や文章構造を理解する力が弱過ぎると、その推測機能を作動させることができない。その時には仕方がないから結局、語句の意味を一語一語辞書で調べたり、文構造を頭を捻りながら考えるしかない。つまり、本来は多読用の教材として提示されたために文量の多いテキストを、ほとんど精読的に読まざるを得ないので、とてつもなく長い時間がかかってしまうわけである。

結局今回の試みは、当初の私たちの意図からそれて、いわば「精読の多読」という形に変わってしまった。私たちの意図した多読とは、語彙的・文法的にはだいたい既知で理解可能なレベルのテキストを用い、それを多量に読むことで、読む際の内容理解をより迅速かつ正確にすること、また同時に既習の語学的知識を定着させることであったはずなのだが。

ミニワールド誌を英文大量インプットのための多読用教材として用いるならば、現在の本高専生の英語力から判断して、3年生以降の方が効果的

であろう。むしろ4, 5年生に適しているのではないか。2, 3年生で使うならば、「精読的な多読」を意図して使った方がいいだろう。

1, 2年生では、もっと易しいテキスト（内容的にも学生の興味を引けるもの）で英文を大量にインプットして英文の感覚に慣れさせながら、もう一方で、教科書や例えばミニワールドのような精読用のやや難しめのテキストを使って、語彙習得レベルや文章構造の理解レベルを徐々に上げていくことがいいのではないか。

1, 2年生レベルでの、学生が興味を持って楽しんで読める多読用の平易なテキストとしては、例えばOxford University Pressから刊行されているOxford BookwormsのGraded Readersなどが薦められる。実はこの教材を今年度の3年生の授業で使ったのだが、使用しながら2年生のミニワールドと比較して、2年と3年で教材を逆にすればよかったと何度も思ったものだった。

8. ま と め

多読指導の効果が学生の側のリーディング力に目に見える形ではっきりと現れるには、今回のいくつかの実践だけでは量的にあまりにも少ない。学生が実際に多読に励んだ期間は、前期の半年間の中の、しかも少々期間だけだった。それ以外の時は、教科書を使用しての精読を主とした多目的指導が従来通りに継続されていたので、結局ほとんどの期間は、インプットされる英文の量も従来通りの少なさということになってしまった。今回の試みは、そういう意味では多読指導実践のひとつの形をモデル的にサンプルとして示したに過ぎないと言えよう。

現在のところ私たちは、より効果的でより面白い（学習意欲の沸く）リーディング学習の方法を試行錯誤で模索している段階である。この実践研究と並行して、他の学年でも少し切り口を変えた形でリーディング指導方法の研究実践をしているが、1年間を通して自信を持って学生に提示できるような方法を早く確立したいと思っている。さらに、高専での5年間全体を見通したリーディング指導のあり方についても、英語学習指導全体との関わりという視点も含めて、十分な思索に基づく実践を展開していきたい。

使用教材

- ・ MINI WORLD ミニワールド（発売）
構造システム（発行）
No. 64 & No. 45～58

参考文献

- ・ 田崎清忠 編「現代英語教授法総覧」
大修館書店 1995
- ・ 津田塾大学言語文化研究所読解研究グループ編
「学習者中心の英語読解指導」
大修館書店 1992
- ・ 茨山良夫 監修, 福井英語教育懇話会 編
「これからの英語教育—研究と実践」
東京書籍 1998
- ・ 金谷 憲 編著「英語リーディング論」
桐原書店 1995
- ・ アルク地球人ムック「英語教育事典 リーディング特集号—訳読主義に代わるものは何か？」
アルク 1997
(平成11年11月30日受理)

